

保育園児における歯科疾患罹患状態の  
地域差とその背景について

○井上浩一郎, 森主宜延, SYEDA S. F. HUQ,  
岩崎智憲, 小椋 正.

鹿児島大学歯学部小児歯科学講座

目的： 歯科疾患罹患状態の地域差は、以前から報告されている。地域差も、年代の経過とともにその状態は変化し、その原因として、それぞれの地域の社会状況が強く影響しているといわれている。社会状況は年の経過とともに変動する。従って断続的に歯科疾患の地域差とその背景を調査していく必要性は高い。今回、大都市、地方都市、そして山村部の3ヶ所について歯科疾患罹患状態を比較しその背景について調査したのでその結果を報告する。

対象と方法： 調査対象は、東京都内保育園2園、男女合計132名、鹿児島市内保育園7園、男女合計287名、岐阜県大野郡白川村2園、男女合計66名、総計485名である。調査方法は、齲蝕、不正咬合、歯肉炎の臨床診査を行い、アンケートにて、受診、育児担当者、食生活、歯みがき習癖の有無について調査した。得られた資料は、2歳以下(乳児)と3歳以上(小児)の2群に分け統計学的(t検定、 $\chi^2$ 検定)に検討した。

結果： 齲蝕罹患状態について、乳児では、東京の対象が少数のため、統計的比較は不可能であった。小児では、齲蝕罹患率について、白川村が最も高頻度を示し、鹿児島、次いで東京が最小頻度を示した。齲蝕の重症度ならびに処置完了者率ともに齲蝕罹患率と同様の結果であった。また、無齲蝕者率はこれと逆の頻度を示した。咬合については、正常咬合の頻度が、白川村、鹿児島、東京の順に高頻度を示した。PMAについては、PMAの判断が微妙なため、全く同一診査者が行った東京と鹿児島との比較で乳児、小児ともに鹿児島が高い値を示した。齲蝕に関係する生活要因として、“甘いものをあたえていますか”“家庭でいつでもお菓子が食べられますか”そして“寝る前にお菓子を食べますか”の項目で齲蝕罹患状況と同様な順位の頻度をしめし、歯ブラシの介護では、逆の順位の頻度を示した。

当院に来院した乳歯重症う蝕患児  
の実態について

○品川光春、品川知通子

しながわ小児歯科医院・佐世保市

今回のメインテーマである“小児の健康作りを目指す”ためには、現在でも小児歯科臨床における最大の疾患であるう蝕を予防しなければならぬ。う蝕の中でも、重症う蝕に罹患した患児には、その後には萌出する永久歯のう蝕、歯列および咬合、咀嚼機能、悪習癖など臨床上的困難な問題となる疾患を併発する可能性が高い。ところが現在でも、まだ重症う蝕に罹患した症例がみられるのが実状である。

そこで今回、昭和62年から平成3年度までの過去5年間に来院した乳歯の重症う蝕患児284名についてその実態を調査した。重症う蝕の診断は、各う蝕分類にすべて適合する乳歯すべての歯牙がう蝕に罹患している症例とした。年度別に初診患児のうち占める割合は、最低7.25%から最高8.71%迄であまり変化がなく平均8.07%であった。また特に問題となる治療および定期診査の受診状態やT.B.I.において検討を行った問題点などについて検討を行い、乳歯重症う蝕患児の実態を把握すると同時にその対応について考察してみたので、その結果について報告する。